

きーずハウスは発展していた

全国山村振興連盟事務局長 實重重実

4年前に一度報じました「きーずハウス」に 9月の3日・4日に行ってきました。3年ぶりの訪問となりました。きーずハウスは、開設されてから来年で10年となりますが、驚いたことに、ますます発展していました。日本農業新聞の元編集局長を務められた永井考介さんが運営しておられる地域活性化施設です。

永井さんは、退職後ご両親が住んでおられた古民家だった生家を改造して、緑豊かな広々とした庭に、多目的ホールや宿泊施設を作られました。ホテル、レストラン、カフェ、集会所、イベント会場、地域製品の販売所、機械のリースなどの機能を兼ね備えた施設であり、地域の人々や地域外からの来訪者、更には外国人が口コミで集まり、交流をする場となっています。

この施設は、永井さんの出身地である愛知県西尾市にあります。この地は もともと「吉良町」と言って、吉良上野介のいた土地として有名です。

永井さんは日本農業新聞の記者として、全国を回って地域の活性化活動取材されていました。そして、各地で活動をしている人々を見るにつけ、その様子が有意義で楽しそうだと感じ、「記者という傍観者としての立場でなく、自分も地域活性化の担い手として活動してみたい」と考えられていたとのことでした。

この多目的施設を運営する傍ら、永井さんは、土地の歴史の講義をしたり、お寺でクラシック・コンサートのイベントを開催するなど、地域の活動する様々な人たちのネットワーク作り活動をして来られました。

今回訪問してみて、更に充実されたと感じたのは、本年7月に「ローカル情報センター」という棟を新しく開設されたことでした。このセンターは、地域の様々なイベント情報や観光・地域紹介パンフレットなどを集約し、発信する場として作られたものです。その店舗では、地域の特産品であり、伝統のあるブランデー・ケーキも販売されています。

そしてこの多目的施設において、私は永井さんと地域活性化や東京一極集中の是正について語り合いました。話し合いには、永井さんが招いてくれた金融機関 OB で地域の歴史を学んでいる男性も参加していただきました。この人は、「ローカル情報センター」の情報収集のお手伝いもされているとのことでした。

また現役の大学4年生の女性も加わってくれました。この人は、離島で宿泊施設を起業することを企画していて、永井さんの施設で働きながら、施設運営のノウハウを学んでいるとのことでした。

午後4時半から夜の12時まで、現場でのご苦労や将来の地域社会、日本社会のあり

方などについて話を伺い、大変参考になりました。

特に永井さんは、記者時代の長い経験から、「定年退職した人間は、その経験や蓄えで若い世代を支援していかなければならない。ただし東京では、どうしても組織人間になってしまい、地域社会の人脈を一から構築していくには無理があるので、自分は 田舎を選んだ。」と言っておられました。

永井さんの意見は、「若い人にとっては、半農半Xも魅力的ではないか」というものであり、金融機関 OB の方は「山村も I T 環境を整備して企業誘致をすれば、やって来る企業もあるのではないか」という意見でした。

しかし、2 人の意見は対立するものではなく、「むしろ両立させることによって、柔軟で多様な選択肢が生じるのではないか」と永井さんがまとめられました。

なるほど、例えば「企業に勤めながら、副業として半農半Xをする（兼業半農半X）」という手もあるわけです。

そして私は何よりも現役大学生の女性が言われていたことが印象的だったのですが、「今の学生にとっては、労働力の売り手市場なので、企業への就職自体が難しいということはない。むしろ、企業組織の中に埋もれてしまって、つまらない人生になることを、みんな懸念している。」と言われるのです。そして、「SNS のブログを使って有料で自分の経験を発信し、それだけで生活費を稼ぎ出している人もいる。I T を含めて様々な選択肢があり、様々な生き方を自分で選べるようになっている。」とおっしゃっていました。

この人は、大学で学ぶ傍ら、企業のためのフリー・スクールにも通っていて、そこには起業志向の若者たちが集まっているということでした。

なるほど私の若い頃などは、どこかの組織に就職するか、親の店を引き継ぐ などして自分で店舗を開業するかといったような選択肢しかなかったのですが、今では I T や A I の発達などによって、多様で柔軟な選択肢が、工夫すれば種々あるのだということに目を開かされました。

「今の若い人たちは、労働環境が厳しくて大変だ」などということばかり思っていたのですが、むしろ頭を切り替えれば、選択肢が広がっているわけです。そして、「自分一人で生きていけばなら、食べていけないことはない。むしろ、楽しくてやりがいがあり、幸せな人生になる方が良い。」という考え方も十分納得のできるものではないかと思いました。

それにつけても、この人によると、両親の理解を得るということが、なかなか難しいハードルになっているようです。

山村の側としては、リスクを避けようとして子供の安定を願う親たちの気持ちも考慮して、「安全で安定した雇用先や住環境」を提供できるようになるということこそ大切なのだと思いました。